二〇一七年度「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書

伝統芸能の近代化とメディア環境

大阪市立大学大学院文学研究科　都市文化研究センター

Urban-Culture Research Center

『大江山酒呑童子（酒呑童子話）』保昌屋敷の段・鬼が城の段（本文と略注）

久堀裕朗

公開報告会・演奏会「伝統芸能の近代化とメディア環境」において復曲演奏された『大江山酒呑童子』保昌屋敷の段（切）の上演台本は、先に述べたように、『酒呑童子話（しゅでんどうじむかしがたり）』正本の本文によって作成した。そこで、ここに『酒呑童子話』保昌屋敷の段の本文、及び略注を掲出することにする。節章を除いており、また注も簡略に留めているので、完全なものではないが、同段を鑑賞する際の参考テキストとされたい。

なお、保昌屋敷の段と同じく、南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館に豊澤町太郎師の弾き語りの録音テープが残っている鬼が城の段も、併せてここに収録した。鬼が城の段は国立劇場の第二十四回民俗芸能公演「阿波の人形芝居」（昭和五十一年十月）でも取り上げられ、『酒呑童子話』鬼が城の段として上演されている。その時の三味線も町太郎師であった。この公演の記録は映像として残されており、巨大な酒呑童子の人形を特殊な操法で遣う様子を見ることができる。

凡例

本文の底本には、浄瑠璃正本『酒呑童子話』（菊屋七郎兵衛・松本平助・天満屋源治郎・天満屋安兵衛・勝尾屋六兵衛板／南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館蔵・六之丞026〈初板改修本〉）を、諸本と対校しつつ用いた。「保昌屋敷の段」は底本四十九丁裏三行目から六十三丁裏まで、「鬼が城の段」は九十二丁裏七行目から九十六丁裏六行目までである。底本に忠実な翻刻を期したが、読解の便を考慮し、次のような処置を施した。

イ　底本には段落がないが、曲節等を考慮して適宜改行した。

ロ　句読点は底本の通り、語りの息継ぎを示す句点を「。」を代用して記した。

ハ　漢字は原則として現在通行の字体に改めた。

ニ　反復記号は原則として底本の通りとした。但し平仮名は「ゝ」、片仮名は「丶」、漢字は「々」とした。

ホ　節章・墨譜はすべて省略した。

ヘ　会話・独白・心内語に相当する部分を「　」で括った。

口・初演（竹本源太夫）

○丹後の成合…現京都府宮津市。成相寺（観音）は天橋立を臨む景勝地にある。
○和泉式部―中古三十六歌仙の一人。藤原保昌と再婚し、夫の任国丹後に下った。
○白書院―白木造りの書院。「白」は「知」との掛詞で、「都の取沙汰」も和泉式部は知らずと続く。

○坂上是則―三十六歌仙の一人。和泉式部の歌の師匠というのは架空の設定。

保昌屋敷の段

〽はるか成
天津風たなひく雲の。上人もいつしか武家の。奥方と。名にし丹後の成合に住は都の取沙汰も和泉式部は白書院庭に折咲花盛り思ひをのへし詠哥を筆に。写せは手廻りの。妙共か煙草盆。お茶の通ひも。ひそ〳〵と心を。付て立振まふ家の行義そ厳なる。

「申奥様ふしきの御縁て旦那様と御夫婦にお成なされ都から是へお越なされて此間。間がな透がな机にかゝり。詠哥とやら狂哥とやら。傍で見るさへお笑止な打晴たお庭の景色。御覧も一つはお慰み。お気の薬でござります」と諌め申せは筆を留。「ヲヽ様子云ねはそふ思ふは尤是は自分の慰みてない。そち達も知通り。此成合の配所にござる。坂ノ上の是則様は元我為には哥の師匠御台有明御前の御行衛知ぬに付。急に尋出すへしと。頼光様へ仰付られ追々使重れは。我々夫婦も心を痛める。是則様は此間。奥深く取籠り。経陀羅尼のみ読誦し給ひ。詠哥も常に事かはり。はかない事計遊はして送り給へは。此方からは目出たい事を返哥してお慰め申さん為此様に心をこらす所に思ひかけないお妾の。吉野様か尋てお出なされた故夫保昌殿は配所へ見舞の次手なから。おしらせ申さん為とくよりお出。希のお客の吉野様御馳走申せ」と有けれは。
小笹か差出て「ホンニ夫々其お客は私が。お使にいた跡へお出なされ。しみ〴〵お顔は見しらねと。おちいさい

○張貫のからから槌―「張貫」は張り子のこと。「がらがら槌」は柄を持って振るとガラガラ音がする幼児の玩具。
○つがもない―ばかばかしい。たわいもない。
○がつそう天窓―「今京坂の童、始て髪を置き未だ長ぜずして髻するに至らざる者を、がつそう天窓（あたま）と云、江戸には云ず」（守貞謾稿）
○大切ない―とても大切な。

○おしまづき―脇息（座ったとき、肘を掛け、体を支える道具）のこと。
○屈託顔―心配事のある顔つき。

○左大将―氷室左大将定頼。本作における敵役。

のが有と聞。上ませふと思ふて。是買て参りました」と。張貫のから〳〵槌。袂より取出せは。繁野か押留「ア、つがもないそんな持遊。悦ふ様な和子様ではないわいの。顔も体も真赤に。がつそう天窓て目は光る。力ラの強さ聞ィてたも。昨日も飛ヒ石刎起し。手飼の三毛が腮持ッて。二タつにさつと引裂た。其すさましさ恐ろしさ。人間ンとは思はれぬ。鬼子といふはあれで有ロ」と。遠慮も媚く譏り口。

「アヽコリヤ〳〵〳〵。はしたないそりや何をいふ。高位のお胤大切ッないお子の噂を。重ネて云フたら了簡せぬぞ。急度嗜め〳〵」と。制する折節表の方。「旦那只今お帰り」と。聞て式部は皆々立タせ。かたへにそつとおしまづき。出向カへば。

配所の見舞ィ怠りなく。日毎に通ふ平井の保昌。立チ帰る屈託顔。常にかはりし不機嫌は。何事が発りしぞと。問フ間も気遣ヵひ「ノウ申。いつよりけふは早いお帰り。そしてどふやらお顔持チも勝れぬ。早ふ様フ子を。」「ホヽウ云ハねばならぬ一チ大事。今配所より帰るさ。都の飛脚に出合ヒしが。主人ンの頼光の御書。急用と有リし故。途中にて拝見するよりヤモ驚キながら。委細畏り奉ると使ィを帰した。ソレお見やれ」と差出せば。戴ひて押開き。「ナニ〳〵。先キ達ッて左大将禁庭にて仰付ケられし。有明御前ンの詮ンの義延引に付キ。是則卿に生害させよと。日々の使ィ手詰メなれば是非に及ばず。追ッ付検使を指シ向られん。其用意肝要たるべし」と。読も終らずハアはつと。暫し詞もなかりしが。

○筆留―手紙の文章の終わり。留め筆。

○仕様もやう―仕様模様。何かをなすべき方法のこと。

○気が廻って―邪推して。いろいろと推測して。

○籠中に雲をこふ―正しくは「籠鳥（ろうちょう）雲を恋ふ」。拘束されている者が自由な境遇をうらやむことを籠の中の鳥にたとえる。

○不時に―思いがけない時に。

「ホヽウ驚きは尤。某も今以ッて当惑ながら。心を付ケれば筆留に。其用意肝要たるべしとなされしは。此保昌に分別せよとの謎々ならん。其方も倶々に思案召れ」と。いふを力ラに打黙頭。「成ル程〳〵。検使の来るには間も有ラふ。及ばずながら夫迄には仕様もやうも有そな物。扨吉野様が。和子を連レてお出の様ァ子を。」「サア云出すやいな是則卿は飛立ッ如く久しふりじや早ふ逢たい追付夫へ行ふと有ルは。余りはつみ切たお詞。気が廻ってどふやらいな物。」「イヤそりやお前の聞キやうがわるい。ハテ吉野様は格別。我も人も子に逢たいは同じ事。わたしが娘の小式部を。思ひ出さぬ日もなければ身につまされておいとしぼいそんなら追付お出なされふ。マア其様ァ子を吉野様へ。ちよつとおしらせ申ませふ。お前も暫く御休息」と。打つれてこそ入にけれ。

きのふは花の梢に遊び。けふは籠中に雲をこふ。翅ならねど左迂の。衰へ果し是則卿憂が友なる配所を出しづ〳〵入ラせ給ふにぞ。式部は吉野を伴ひて。立チ出る顔と顔。「ノウなつかしの是則様。ほんに何から云ゝふやら積る事のみ山々なから。マア〳〵御無事なお顔を見て。何ぼふ嬉しい〳〵」と思ひこがれしため涙。縋り付て泣キければ。「ホヽウ年月遙に押移り。対面せざればなつかしいは理り我迚もおことが身の上躬レが事も心にはかゝれ共存しの通り斯左迂の身となれば。都の聞へを憚り。わざと便リもせざりしが。不時に尋ね来りしは様子こそ有らめ。いぶかしさよ」との給へは。「されば以前都にてお別れ申て古里の。しるべの方に一年余り。居るに居られぬ気兼故。其家を出て遠離れし。深山住居の侘しきに。君のお胤の稚子を。大事にかけて育る内。片時忘

れぬお身の上。けふや帰路の御沙汰も有か。あすは御難も赦るかと。待ッかひ泣ぬ日迚もなく。幾春秋を重ねし内。稚ひ者が爺様に。早ふ逢たい〳〵と。いふを力に参りしが。有しにも似ずお顔のやつれ。御いたはしや」と計にて。又さめ〴〵と泣ければ。

不便と思へど是則卿。せきくる涙を押かくし。「思ひも寄ぬ災難故保昌夫婦の心遣ひ。中々詞につくされず。扨しもおことが養育せし稚き者が。父に逢んといひしこそ。真は泣寄譬に違はず親子対面させんと有。仏神の告と思へば。猶もつて早く逢たし。とく〳〵是へ伴へ」との給へば吉野の前。「イヤ只今はアノ離座敷に。余念もなふ寝ておりますが。山家育のわんぱく者。独目の明迄置ねば。寝起の不機嫌あばれ出したら手に合事しやござりませぬ」と。いふを式部が引取て。「ソリヤお前にあまへてのわやくで有ふ。わたしがそつと起しまし。とつくりと様子をいふて。御対面させませう。」「なるほど〳〵そんならお前にまかしまする。サア〳〵お出遊ばせ」と。案内に連て是則卿式部も。

〻伴ひ入にける。

山鳥のねぐら隔てゝ。夫乞る。思ひを包む小風呂敷。戴くつむり。おくれ髪矢背か。小原の賤の女が。御門内へと入来る。

「下れ〳〵待おらふ」と。下部が声に立留り。「待ふ下れと云へしやんしても。待ッ事ならぬ火急の願ひ。

○真は泣寄―「親は泣き寄り」。不幸に際して、親子、親類の者は、心から悲しんで集まってくれること。血縁者は親身に相談に乗ってくれること。

○わやく―聞き分けないこと。わがまま。

切・初演（竹本弥太夫）

○山鳥のねぐら…―山鳥は雌雄が峰を隔てて別々に寝る習性があると考えられていた。

○小原の賤の女―大（小）原女（おはらめ）。大原や八瀬の里から、京の町に柴や薪などを売りに来る女。

○にやア―八瀬・大原方言。「やせやをはら木くろ木たばね木。柴めされとぞうりにける……京の御所でさい〳〵見たおくげ様達じやはにや」（酒呑童子枕言葉・第二）
○でつかちない―たいへん大きい。
○ほうげた聞―口をきく。物の言い様をする。
○かなきびす―「きびす」は足のかかとのこと。「かなきびす」は固いかかと。
○黒木―生木をかまどで蒸し焼きにして薪にしたもの。
○いたゞき付ケた―大原女は頭に黒木を乗せて売り歩くことから言う。
○しれ者―愚か者。
○奥書院―家の奥の方にある書院造りの座敷。
○矢背の里―八瀬の里。現京都市左京区。比叡山の西麓にある。

奥へ通るが無理かいにやア。入ラさる留メ立テ邪魔さんすと。ひどい目に。ホ、、、、。合すがにやア。置カんせにやア」と云イ捨テて歩み行先キ。「ヤアでつかちないほうげた聞ク。ソレぶち倒しかなきびす。戴かせい」と双方より。取リ付ク腕しつかと取リ。「こな様ン達チのきびすより。堅い重たい黒木たばね木。いたゞき付ケた此女ナ子。覚の手並見せふぞ」と引寄セて投付ケられ。沈で来るを引ッとらへ。一トしめ〆て打付クれば。「扨こそしれ者通すなやるなしばれくゝれ」とひしめいたり。

「ヤレ家来イ共聊爾すな」と。立チ出る平井ノ保昌悠々と押シ直り。「何者にもせよ。過急の願カひと有レば聞キ捨テがたし。殊に女ナ苦しうない」と。様子有リげに家来を遠ざけ。「イザ先是へ」に「あい〳〵」の。詞億せず奥書院。傍近カく手をつかへ。

「私シは矢背の里の黒木売。元トは是則様の御台。有明御前に仕へし者。御行衛知レぬ有リ明様。此程在所へお出なされ。思ひがけない御自害。我レ故流罪の是則様。お命チも危しと聞キ。申シ訳に我カ首を保昌方へ送クるべしと。御遺言に是非なくも。いたはしながら御首討。遙々持ッて参りし」と。風呂敷キといて器物。奥の方より妙おざゝ。同じく器持チ出て。

「是は此度ト吉野様。和子様連レてお出に付キ。心計リの土産物。差シ上ケよとの仰られでござります。」保昌左右を打詠め。「賤の女が持参ンせしは大切ッ成ル器物。とくと内イ見ン致した上実検に備へん」と。傍に引キ寄セ蓋取レば聞キ

しに違ァふ空しき器。「サア御内ィ見ンなされたら。御返ン答が承りたい。」「ムヽスリヤ此器が有リ明御前ン」と。顔打守り。「ハレ神ン妙な仕方タじやよな。シテ此器は。吉野殿の土産物。さらば賞翫致さふ」と。開ラけば是も空しき器。「ムヽハテかはつた土産物」と心に黙頭。「双方共に落手致した。小笹此旨吉野殿へ。賤の女は嘸草臥。暫く休息致すべし」と。左右に器取リ持て心。残して奥に入。

跡見送クつて。賤の女は。身一トつに積憂涙袖に包て独言。「所の詮ン義強ければ。有明ケといふ名を隠し。我カ君の御難ン義を。救はん為の器の謎。夫レと悟りし保昌が。情ケの詞聞クに付ケ。恨めしいは吉野の前。妬みそねみのない様ァに。産落した子を取かへた。堅い契約反古にして。我カ行衛なふ成リしを幸ィ。是則様に付キ添て。偽りかざる道しらず。そふした心と知ルならば。血を分ケた大事の子を。何ンの取リかへ置ク物ぞ。謀られて口惜シい」と。恨み歎きて。居たりしが。「アヽ悔むまじ歎くまじ。何事も皆君の為。せめてお顔を余所なから」と涙隠してしほ〳〵と。一間の内へ入給ふ。

折ふし奥に吉野が声「なせ聞入ては下されぬ。首討ッてたべ保昌殿」と取付キすがるをふり払ひ。立出る保昌か。刀の柄に手をかくるを「ヤレ待タれよ。有明ケ御前の身替りに立んと。最前の器の謎。適貞女と感する程。殺されぬ子細有。」「イヱわたしを押シ留メて。有リ明ケ様を討ッ心か。」「本ン人ンの首討ッに。分ン別思案も入リ申さぬ。」「そんなら但し是則様を。」「サヽヽお命を助ケん為。種々に心を砕き居る。」「イヤ〳〵やつぱり私シを手にかけて。

○夫こそは…―『酒呑童子出生記』では「夫にこそ保昌。心を砕く今日只今。そなたの首討し ら化に。有明御前の御身代。命にかけて願はんと。」とある。
○しら化―そらとぼけること。

○人は氏より育ち―家柄や身分より、教育や生育環境の方が、人間の形成に大きな影響を与えるということ。

お二人リを助けてたべ」と。争ふ声に有明御前。「お前に礼は此通り」と。守り刀ナを抜クより早く咽にがはと突立ッれば。「コハ〳〵いかに」と二人が仰天。是則式部も立チ出て。「ヱ、遅かつた保昌殿。なぜ此式部を手にかけて。お役に立テては下されぬ。コレ申有明様早まりし事おいとしや」と涙と倶に。いたはれば。「ホ、夫レこそは保昌か。そちが首討チしら化に。命チにかへて願ハはんと。思ひし内に早生害。ヱ、しなしたり残ン念ン」と後悔涙に暮レければ。是則すゞしき御景色にて。「保昌夫婦が親切は祝着ながら。有明が生害は察する所。吉野が是へ来りし故。恨みての事ならん。日頃に似合ハぬ物ねたみ」と。聞ク に悲しさ有リ明御前。「其お詞は曲もなや。恨ねたみを敵にし。命を果す有明ならず。元トの発りは左大ィ将に。手を負せた自ラ故。潔ふ討タれんと。覚悟極めし其内に。思ひがけなき吉野様。爰にと聞ケば気も廻バり。聞コへぬ仕方と思ひの外。我カ身にかはつて死ナんと有ルお心ざしの忝なさ。死を急ぎしが。云訳ぞや。夫レのみならず情ケない。互ヒに心隔てぬ為。産落すから取リかへて。我カ子と育てし般若丸。教へを守らぬ我カ儘者。夜に増日に増猛々しく。我カ手に余マる悪道が。積り〳〵て鬼神ンと成リ。雲を招ひて飛ヒ去し。今世に恐るゝ大江山。酒呑童子と呼るゝは。般若丸が事なるぞや。人は氏より育ちとて産のお前の手に有ラば。いかなる聖人賢人とも。成ルべき物をあさましや鬼となしたは。我カ業とお恨ミ受るが情ない。悲しいわいの」とかきくどき。歎く涙は。紅ひの血汐に。流れをあらそへり。

聞に吉野は身にこたへ。骨も砕くる苦しさに。とかういらへもなかりしが。やゝ有ッて顔を上。「ノウ勿体なや有

○田村利仁卿―坂上田村麿と藤原利仁は本来別人だが、同一視されることがあった。幸若舞『未来記』御伽草子『田村』など参照。「坂上田村麿と利仁とは一人にあらず。別人なり。」（広益俗説弁）
○言の葉草―和歌のこと。
○三吉野―「み」は吉野の美称。御吉野。
○朝ぼらけ…―「朝ぼらけ有明の月とみるまでによしのの里に降れる白雪　坂上是則」（古今集・冬三三二）
○目に見ぬ鬼も…―「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」（古今集・仮名序）
○浮む瀬もなき―苦しい状況から抜け出す機会もないこと。
○体卵湿化―正しくは「胎卵湿化」。胎生、卵生、湿生、化生の四生。あらゆる動物のこと。
○周の雷震―周の始祖・文王の養子。「昔日先君商に入り玉ふの時、雨を燕山に避くるの処に、忽雷棺中の女の胎を破つて一男子を得玉へり、因て雷震と名づく」（通俗武王軍談・巻三）
○安倍の清明―平安中期の陰陽家。母が信田森の狐であるという伝承がある。
○理非顕然―物事の是非をはっきりさせること。

明さま。罪も報ひも我身の上。是迄深く包みしが。胸にあたりし今の詞。聞てはどふも隠されず。懺悔に明す物語り」と居直つて。気色を改め。

「我は元ト来人間ならず。往昔田村利仁卿。勅に従ひ。鈴鹿山。亡ぼされたる鬼神の余類。先祖の怨を報はんと思ひを。凝す折も折。月にめで。花を愛するやさ人の言の葉草は三吉野へ。遊覧有し是則卿。田村の子孫に近寄て謀り討タんと美女と化し。窺ひ寄ル共白雪の。興に乗じて斯計。朝ぼらけ。有リ明の月と見る迄に。吉野の里に。ふれる白ラ雪と。つらね給ひし三十一文字。目に見ぬ鬼も和らぐる実神ン国の和哥の徳。邪念も積る雪と消互に思ふ。恋草の。情の種を身にやどし産落せしは男の子。人間ならぬ此身にて養育せん事覚束なく。嫉妬の心持ぬ為と取リかへ置キし般若丸。母の本性受ケ継でおのれと顕はす悪鬼邪鬼。浮む瀬もなき身の上を。不便ンと思し給はれ」と。語るを聞て是則卿。希代の珍事と御驚き。手負も倶に保昌夫婦呆れ。果てぞ見へけるが。横手を打て「ハア奇成かな妙成かな。体卵湿化の四生を分てど。人ト の子に異形有リ。畜生の子に人間有。物に感じて生を保つ。周の雷震。我カ朝の安部の清明。況や鬼畜の腹ラを借し般若丸。母の骨肉受継で。悪鬼となる事理の当然。是不思義にて。不思義に有ず。」と明智の詞に。是則卿。「ホ、今保昌が云し如く。我レをねらひし其方か。善心に翻りしは宿世の奇縁。般若丸が強悪は。代々に仇なす朝敵なれば。恩愛不便の道を断。却つて敵と心得べし。必ず悲しむ。事なかれ」と理非顕然たる御詞。ハツト計に吉野の前心の曇り晴せ共。光りを覆

○ふり〳〵太鼓―振振太鼓。でんでん太鼓のこと。
○ふり鼓―振鼓（雅楽で用いる楽器）に似せて作ったおもちゃ。でんでん太鼓の類い。

○畳ざはり―畳への触れ方。立ち居振る舞い。
○うつしう―不詳。「うつくしう」か。

○頑是なければ―幼少でまだ分別がないので。

○もだしがたし―無視しにくい。
○古木の角……―「其たけ一丈の鬼神の。角はかぼく眼は日月」（謡曲・紅葉狩）「角はみやまのかれ木に似て」（酒呑童子枕言葉）

ふ。有リ明の。今端の声も細〳〵と。「ア、嬉しや忝なや。互ィに心明カし合。身の上懺悔に罪も消。心にかゝる事なけれど。我血を分し稚子に。一ト目逢ィたい逢せでたべ」といふに吉野が一ト間に向ひ。「怪童丸。〳〵。」「ヲツ」ト答ふる声の下。大の斧肩車。片手に鳴す。ふり〳〵太鼓ふり鼓遊びに余念母の前。立チはたかりし。大の童子。

「コレ坊。山道を馳る様フに。其畳ざはりは何事。お爺様も夫にござる。行義にうつしう膝まつき。お辞義申しや。コレアレあの有リ明様は。そなたの真実のかゝ様。お傍へいてとつくりと。顔見せましてたもいの」と。差寄ればしろりと見て。「イヤ〳〵。ありやおれが嚊様じゃない。かゝ様。〳〵。嚊様なふ」と泣叫へば式部さし寄リ。「ヲ、其筈〳〵。頑是なければ合点が行クまい。そんなら馴染のお袋様。ソレ〳〵そこに」と押やれば。「イヤ〳〵是もそふじやない。ほんまのかゝ様呼ンでいのふ。かゝ様どこへいかしやつた」と。うろ〳〵きよろ〳〵尋ね廻ハり。一ト間の内へ欠入ッたり。

人々いかにと怪しめは。「ホ、ウ御不審は御尤。此程是へ来るよりは。姿をかへし此顔が。常々山で育つた顔と。かはつた故。」「左こそ有ラん怪しき本ン性包ミ隠すは尤ながら。最早始終を懺悔して。ちつ共恥らふ所でなし。今端の際に有リ明が願カひの程ももだしがたし。早く誠の姿を顕はし彼レに得心さすべし」と。いさめ給はる詞にせまり。歎き伏シたる吉野の前。顔ふり上ればこはいかに。額に古木の角生イ立チ。眼の光り月日の如く。剣に等しき牙

○一ぺん―そこらじゅう。

○自余―これよりほか。

○七度結んで…―「七度」は回数が多いこと。深い因縁があること。「片時はなれぬ兄弟の、六度契りて兄と成、七度むすびて弟と成と伝へしが」（浄瑠璃・百日曾我）

○ないもせぬ―あるはずもない。

をかみ。誠の鬼女と形ふりも声もあらはに。「ヤア〳〵怪童。尋る母は爰に有りとう〳〵。出よ」と呼はつたり。「アツ」トいふよりかけ出て。「ほんに爰にじや。一ッぺん尋ねた。かゝ様コレ。乳が呑みたい」と。膝にもたれて。余念なき。

母は見る目も涙ながら。「自余の子ならばこはがつて傍辺へも寄付まいに。いかに朝夕見れば迚。此恐ろしい顔を見て。悦ぶ程猶悲しい」と云つゝしぼる。涙の袖顔に覆ふと見へけるが忽ち元の。吉野の前。姿詞も改めて。「コレ怪童。あれにござるが誠のかゝ様。お傍へいて。今ン生のお暇乞」と。聞に手負は痛手を忘れ。「ヤレ我ガ子や母なるは。母じやはいの」とにぢり寄リ血汐の膝に。引寄セて。「ヲ、母が力を受継でか。たくましい生マれ付キ。コレ養育なされた吉野様。父御は元トより。お二人に孝行つくし。忠臣ッの名を上ケてたべ。七度結んで親と成リ子と成。縁ンは有ながら。逢が別れと成事はよく〳〵薄い。親子の契り。名残リ惜シや」と取リ付イて悔みかこてば只おろ〳〵。「何ぼ其様ッに云しやつても。わしが嗅さんじやないもせぬ物。夫レでもどふした事じやコレお前の死ナしやるのが。おりや悲しうて。〳〵。ほんぐ〳〵の涙が出る。ヱ、〳〵どふも涙が。コレ泣キたいわいの」と足摺し。血筋の別れ。傍に見る目のいぢらしさ。「ヲ、よふいやつた。よふ云ッてたもつたのふ其一言が未来の土産。サア保昌殿。片ン時も早く我首討チ。君の御難ンを救ふてたべ。名残リは尽じ是則様。いづれもさらば」と声の下。剣を抜ば有リ明の雲隠してはかなくも此世の息は。絶けれは。

○焼野の雉子夜の鶴―親が子を思う情の深いたとえ。（野を焼かれた雉子は巣にいる我が子を助けようとし、巣ごもる鶴は羽根で子を暖める。）
○天神地祇―天の神と地の神。すべての神。
○万劫―極めて長い年月。

○現心―夢うつつの状態。
○皇太子の御告―御殿の段「此度鬼神退治の勅命を蒙り。近々大江山へ発向仕るべき所。昨夜ふしぎの夢の中。聖徳太子我に告て宣はく。汝大江山へ向ふならば。仏法守護の四天王持国増長広目多門の兜を与へん。四天王と名付。四人の郎等を具すべしと宣ひしは正夢にて。枕に残る三つの兜授くべき郎等は綱。季高貞光三人は有つれ共。今一人は兜もなく家来もなし。其臣下を尋ね求め。四天王と名付丹州へ赴ん。」
○生長―性質。体つき。

○手そゝぶり―手で物をいじること。手なぐさみ。
○芽―萌芽。物事の起こる兆し。

「わつ」と計に人ト々は。歎きの声にいとゞ猶。吉野の前はかきくれて。「いづれ生有ル者として。焼野の雉子夜の鶴。子を思はぬはなき物を。人トならで。人トにまじへし其報ひ。我カ子は外道の首領となり。天神ン地祇の御罰を受。幾万ン劫を経る迚も遁れがたなき罪科」と。猛き心も今更に。先非を悔て泣ク涙。是則卿は身にかゝる。涙の雨か保昌夫婦心を察し諸袖に。伝ふは露の玉あられ膝に。たゝへて渕なせり。

涙払フて吉野の前「実。思ひ出したり。今朝暁の夢の告。怪童が出ッ世を思はゞ。此庭前ンに苔むす石を開き見よ。中カに一チ物有ルべしと現心に聞キしもふしぎ。ソレ其石を破て見よ。」「ヲツト合点ン」と小踊し。花も千草も踏ミちらし。差シ図の大石真ッたゞ中カ。くはつしと打テば打破レて内に輝く星兜。怪しくも又ふしぎなる。頓て取リ上ケ両手に捧げ。「コレ〳〵伯父様見さつしやれ」と。渡せば保昌押シ戴き「ハア、、、有リ難や忝ナや。皇太子の御告に違カはず。是こそ頼光御尋ね有ル多門ン天の星兜。授給ひし所にこそ。武勇の臣ン下有ルべしと。霊夢は一ッ騎当千の怪童丸が生長。君にも嘸や御満ン足。四天王の一人ンを。怪童丸共呼れまじ。直ク に保昌ゑぼしして。坂の上の頭ラ字と先祖田村の田の字を取リ。公に仕ふる時キを得て。坂田の公時と名乗ルべし」と。聞クよりいきつて「扨ッてもよい名じや面白い〳〵。頼光様へ奉公し。鬼でも蛇でも。掴み殺して見せませう」と。手そゝぶりして悦びし。四天ン王の随一と勇士の芽かんばしき。

是則卿は安堵の面ン色。保昌益々勇みをなし。「有リ明御前ンの御首を都へ持参ンのよき次ィ手。頼光公へ御目みへ公

時用意」と勧むれば。吉野留めて「ヤレ暫ラく。いまだ幼稚の悴レなれば君のお役に立ッべからず。伊豆の国に連レ行て。足柄山の権現に祈り。大江山発向迄。日を以ッて月キにかへ。月を以ッて年シとなし。暫しが内に成長させ。不時に風立。樹々の枝葉の栄へし時。都に送ク り仕へさせん。我レは元トより山住ミの。其名も直クに山姥が。影身に添ッて守る上は。山又山を隔つ共君のお傍にいつ迚も公時有リと。思し召名残リは尽キじおさらば」と。輪廻の紲忽チに。又も頭ラに角生じ。夜叉の形ちを顕して別れを告る。妹背の縁。はかなく消し有リ明の。此世の縁ンは薄く共。花の台に法リの縁ン。頓て帰洛と是則に。傅く式部は師弟の縁。都へ旅ヒ立ッ保昌が。忠義は主従三世の縁。君に仕ふる公時キが其名も。高き山姥が。山に育てし因縁謂代々に伝へて。いちじるし

○山又山を…―謡曲『山姥』「山又山に。山めぐりして。行方も知らず。なりにけり。」

○花の台に…―「花の台」は極楽往生した人が座るという蓮の花の台のこと。「法」は「（仏）法」と「乗り」の掛詞。

初演（シテ豊竹巴太夫・ワキ豊竹君太夫・ツレ竹本源太夫）

○羽黒山―山形県北西部の山。修験道の霊場として有名。
○愚人夏の虫―「ぐにんなつのむし飛んで火に入るとは今こそ思ひ知られたり」（御伽草子・酒呑童子）。頼光の言葉以下、基本的に近松『酒呑童子枕言葉』第四を踏まえた内容。
○いんにんきやらい…―「いんにんぎやらいがるまんすうがう〳〵らうとて入けるか」（酒呑童子枕言葉）

○禿―子どもの髪型。おかっぱのような髪型。
○けつちう―夏（か）の桀王と殷（いん）の紂王。中国の暴君。

○役の行者―役小角（えんのおづの・おづぬ）。修験道の開祖。
○後鬼前鬼―役の行者に仕えた夫婦の鬼。
○大峯山―奈良県南部。役行者が開山した修験道の根本道場。

鬼が城の段

丹波の国大江山鬼が崖の城廓は。岩をたゝんで築地となし。鉄門ン厳しくさし堅め異類異形の券族共。非常を守つて扣へしは類ひ。希なる要害也。

されば頼光主従は。女が手引キに漸と崖の辺りに至り給ひ。門ン外ィに大音上。「羽黒山ンの山伏シ。道踏迷ひ日をくらし。お宿の御芳志願ひ入ル」と。高らかに呼はれば。「スハ愚人ン夏の虫引さき喰ん」とひしめきしが。「イヤ〳〵上の御咎メ先ッ々申シ上ケての事。是へ〳〵」と呼ヒ入レて。「いんにんきやらい。がるまんすうかう〳〵ろふ」迚入リけるが。只獣の吼るが如く。更に通する事はなし。

時に山鳴谷ひゞき。風なまぐさき其中カに。蘭奢のかほりふん〳〵と。四方に薫じ鉄のとばり。さつと開ラかせ酒呑童子。面ン色クは薄紅梅。頭ヲ禿に眉しげり。大格子の唐綾紅ィの袴着流し玉の様ァなる上臈達チ。腰打手を撫足按り。枕に立テし鉄の棒。けつちうが奢のまなざし。人々をきつと見て。「我カ住ム山は常ならず。峯に雰立チ谷底に雲起る。木樵炭焼杣人トも道なければ来る事なし。増シて況や人ン間ンのそも。天をかけつて来タるかや語れ。聞カん」と仰ける。

頼光聞コし召シ「御ふしんは御尤。抑我レらが祖師役の行者。後鬼前ン鬼と云フ鬼神ンを育み。道なき山を踏ミ分ケ給ふ。流れを汲我レ々も。本ン国羽黒山を出。大峯山ン上を廻ク り来て。都一ッ見ンの為夜を込夜をかけ急ぐ道山陽道よ

○一樹の陰一河の流…―「一樹の蔭一河の流れ、皆これ他生の縁ぞかし」（謡曲・山姥）。知らぬ者同士が同じ木で雨宿りしたり、同じ河の水を汲むようなことも、前世からの因縁であるということ。
○持せ―土産。贈り物。「もたせの御酒のありと聞く」（御伽草子・酒呑童子）。

り踏迷ひ。思はずも童子の御目にかゝる事。役の行者の御引合せ一樹の陰一河の流。他生劫の縁とかや。酒を持せ候へは童子へも参らせ我々も夜もすから酒盛せんお宿を恵み給へかし」と余義もなげにぞ述給ふ。

○世尊釈迦仏も鬼神のゑしきと…―「されば世尊は雪山童子のいにしへ。四句の文に身をかへ鬼神のゑじきに成てこそ。正覚を成じ給ふなれ」（酒呑童子枕言葉・第四）

遐の童子も名将の弁舌に欺かれ元来好む酒と聞。「ヲヽ殊勝に候客僧達行法と云山路の酒の風流花も実も有面白や持せの御酒も給はらん童子か酒も参らせん。我秘蔵の后へも。一つ呑せてもらひたし是へ〳〵」と呼けれはいたはしや小式部は。憂に痩てたよ〳〵と。人々を見るよりも。はつと古郷のなつかしさ。浮む涙に暮けれは頼光夫そと目遣ひを。童子見咎鉄棒追取つつ立上り「ヤアわぬしは頼光ならん心赦すな券族共」と鉄棒とふと突ならし。両眼くはつと見開きしは身の毛もよたつ計なり。

頼光から〳〵と打笑ひ「日本無双の兵共に似たるとは。先は仕合せ去なから世尊釈迦仏も鬼神のゑしきと成てこそ。正覚は得給ふなれ露塵程も惜からぬ命を召れ候へ」と合掌してぞおはします。

○たく老―濁醪（だくろう）。どぶろくのこと。

「ホヽウ殊勝にも聞へたり。よしなき事を申たり打とけ給へ人々よそれ〳〵銚子お盃。早ふ〳〵」と申ける。券族の悪鬼邪鬼踊出て上臈達を掴み寄腕を抜股をそき血をさら〳〵と絞り出す雫長柄の銚子につき盃添てそ出しける

山家のたく老亭主の役と。童子一ト口さらりとほし。頼光にさしければ。「縁ッにつれて珍ら敷御酒宴につらなる」と。押戴いて丁ど受。つつとほして公時にさゝれけれ「待兼たり」と頂戴しつゝけて。三盃ついとほし。天窓

たゝいて「味い〳〵。加賀に菊酒伊丹にふし見。色々名ィ酒は呑たれ共。こんな酒は呑ミ始め。各々一ト つ」とさしければ。「ソレ〳〵肴」と詞の中。今切たると思しき女の腕。脛まな板に。盛リならへてぞ出しける。

「ソレ調じて参らせよ。」「承はる」と立所を。頼光おさへて。「かゝる嘉肴を迚もの事。某調味致さん」と。指添抜て肉四五寸。ずつと切て口に入。「たいご〳〵」と誉給へは。「我レも〳〵」と四天王押切。〳〵舌打して。

○たいご―醍醐味（だいごみ）。おいしい。

「よふお肴」とぞ誉にける。

○しんしやく―遠慮。辞退。

童子驚き。「我カ好む酒肴。客僧達に饗さば。しんしやく有んと思ひしに。返つて賞味し給ふは。心得がたし」と云ヒければ。頼光聞キもあへず。「我等が行の習ひ。慈悲迚給はる物なれば。心に染マねど辞退せず。殊にヶ様の酒肴。本ン来イ空の人ン間ン。空に二タつの味ひなし。御不審有ルな」と答らる。「イヤ其悟りは無の見なり。人トの血を吸。肉を服する事。仏の教へに有リや否や。只今止り給はずば次第〳〵に増長し。童子が如く鬼神ンと成リ。悔み歎き給ふ共其時キはかひ有ラじ。我々が人をふくする事能キ事と思すかや。本ン国に帰り給はゞ我カ取リ殺せし幾千ン人の。後世とふてたべ客僧」としほ〳〵として語りしは恐ろし。くも又哀レなり。

人々目と目を見合ハせて気のたるむを幸ィと。安倍の清明が加持の酒。笈の中より取リ出し。「有リ難き御教へ。血酒をやめてたべ付ケた。御酒に致さん」と各々引キ受呑ム有リ様。童子羨みたまりかね「面ン々計リの酒もり。夫レは胴欲。さあらば童子がお間ィぞ」と。大盃キをさし出す。「お口に合ハんはいさしらず」と丁とつけば。引傾け。引キ受〳〵

三献こし。「是はいか成ル名ィ酒ぞや。天の甘露も斯やらん。早心魂にしみ渡り。殊なふ酔て候」と。いふも理り清明が加持の毒酒。券族共も咽ならし。「爰へも少し〳〵」迚。がうし茶碗を差シ出し。呑ムより早く酔乱れ。足もひよろ〳〵見へけれは「ノウ山伏。夜も更ぬお休スみ有レ。我レもまどろまんいささらば。明日対面〳〵」と。あらうみの障子押シ明ケて奥に入レは券族共。神ン変鬼毒の酒に酔。前後もしらぬ高鼾

頼光悦喜限りなく「神通自在の変化の身としてあす対ィ面ンとはあさましや。今宵の中は過さし物。心静に用意せよ」と悠々として入給ふ。虎の尾を踏龍の髭鰐の口より恐しき。鬼一ト口の毒の心見を鬼と名付ケ初つらん

○がうし茶碗―合子茶碗。「合子」は蓋付きの椀、容器のこと。

○あらうみの障子―「目に見えぬ鬼の間に入り荒海の障子おし明けて。夜の臥処に入りにけり夜の臥処に入りにけり」（謡曲・大江山）

○虎の尾を踏…―「虎の尾を踏む」「龍の髭を撫でる」は極めて危険なことのたとえ。「鰐の口」も非常に危険な状況のたとえ。

○鬼一口―はなはだ危険な目に遭うこと。

○鬼と名付…―飲食物の毒味役のことを「鬼」という。ここはその由来を述べる文章となっている。実際には「鬼食い」「鬼飲み」とは、元旦に宮中で帝の召し上がる屠蘇を薬子（くすりこ）という未婚の少女が鬼の間から出て試食したところからいうとされる。

「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書
『伝統芸能の近代化とメディア環境』

平成三十年三月三十一日発行

編集　久堀　裕朗

発行　大阪市立大学大学院文学研究科
　　都市文化研究センター
〒五五八―八五八五
大阪市住吉区杉本三―三―一三八
電話〇六―六六〇五―三一一四

印刷　博進印刷株式会社
〒五五九―〇〇〇二
大阪市住之江区浜口東二―七―二四